麻布

国語

（二〇二三年度）

《注意》

一　試験開始の合図があるまでは、問題用紙を開けてはいけません。

二　問題用紙は十五ページまであります。解答用紙は一枚です。
試験開始の合図があったら、まず、問題用紙、解答用紙がそろっているかを確かめ、次に、解答用紙に「受験番号」「氏名」「整理番号」を記入しなさい。

三　試験中は、試験監督の指示に従いなさい。

四　試験中に、まわりを見るなどの行動をすると、不正行為とみなすことがあります。疑われるような行動をとってはいけません。

五　試験終了の合図があったら、ただちに筆記用具を置きなさい。

六　試験終了後、試験監督の指示に従い、解答用紙は裏返して置きなさい。

七　試験終了後、書きこみを行うと不正行為とみなします。

次の文章を読み、設問に答えなさい。

両親が離婚し、母とともに祖母のマンションで暮らすことになった十二歳の草児。新しい街にも祖母にもなじめず、転校した学校でも孤立しています。手紙のやりとりの約束をした父からも連絡がありません。草児は部屋にひとり布団にくるまって、以前住んでいた家のことを思い出しています。

古い家だった。ただ古いだけだ。歴史も由緒もない。

インターホンはついていたが、近所の人はみな勝手に玄関の戸を開けて、いるのかと大声で訊ねる。草児の友人の文ちゃんに至っては、自分の家みたいになにも言わずに靴を脱いで入ってきていた。

①文ちゃんのことを考えると、今でも手足がぐったりと重くなる。そのまま身体が沈んでいきそうで、こわくなって掛け布団をぎゅっと握った。

文ちゃんとは保育園からのつきあいだった。身体がずんぐりと大きかった。ひょろひょろした草児と並ぶと、同じ年齢には見えなかった。文太という自分の名を年寄りっぽいという理由で嫌っていた。

俺が草児を守ってやる、が口癖だった。足が遅いし、力も弱いから、俺が守ってやらないといけない、と。通りすがりにたまたまそれを聞きつけた一年生の時の女の担任が「わあ、頼もしいね。草児くん、文太くんがいてよかったね」と声をかけてきて、先生がそう言うのならそうなのだろうとその時は思った。自分は文ちゃんに守られていて、それは幸せなことなのだろうと。

四年生になると、文ちゃんは文ちゃんのお母さんから一日百円のおこづかいをもらうようになった。その話を聞いた草児の母も、同じようにした。ふたりの母はいっしょにＰＴＡの役員をやったりして、仲が良かった。

毎日百円を持って小学校近くのフレッシュハザマというスーパーマーケットに行く**aシュウカン**がうまれた。最初のうちはうまい棒やおやつカルパスなどを買っていたのだが、文ちゃんは次第に、百円以上の菓子を欲しがるようになった。よほど腹が減っていたのか、菓子では飽き足らず、惣菜売り場の唐揚げなどに目を向ける日もあった。

でも金が足りないなあと言いながら横目でちらちら見られると、草児はなんだかそわそわしてきて、毎回自分の手の中の百円を差し出してしまうのだった。文ちゃんは礼を言うでもなく、それをぶんどっていく。

二百円で買った大袋入りのポテトチップスやポップコーンや唐揚げは、ぜんぶ文ちゃんが食べた。「百円出せよ」と脅されたわけでも、「百円くれよ」と泣いて懇願されたわけでもない。それでも、何度考えても、草児には文ちゃんに百円を差し出さずに済む方法がわからなかった。どうしても、わからなかった。

朝、学校で顔を合わせると、文ちゃんはいつもヨウウッとかオオッとかなんとか言って、肩を組んできた。新しい学校には、そんなことをするやつはひとりもいない。正門をとおってから教室の自分の席に座るまで、草児は口を開かない。どうかすると下校の時間までだれとも喋らない時もある。喋ったとしても、先生に話しかけられたとか、消しゴムをひろってもらった礼を言うとかその程度のことだ。

隣の席の女子は、消しゴムを受けとった草児が「ありがとう」と言った時、あきらかにおどろいていた。効果音をつけるとしたら「ハッ」ではなく「ギョッ」というおどろきかただった。

転校してきた日、黒板に大きく書かれた「宮本草児」という文字の前で自己紹介をしている時、誰かが笑った。「なんか、しゃべりかたへんじゃない？」と呟いたのも聞こえた。

ひとりが発した笑い声は、ゆっくりと教室全体に広がっていった。風に吹かれた草が揺れているようだった。風はやがて止んだが、草児はもう口を開くことができなかった。黒板に書かれた「宮本草児」という名も他人のもののように感じられた。両親の離婚を受け入れたことと自分が母の名字を名乗ることになったことは、また別の話なのだ。

担任の先生は笑った生徒を注意するわけでもなく、自己紹介を途中でやめた草児に続きを促すわけでもなく、授業をはじめた。

強いものと弱いもの。頭のよいものとよくないもの。教室には異なる種の生物が共存している。くっきりと二分されているわけではなく、あるものは足がはやく勉強ができるが、性質がおとなしく、あるものはどちらもそこそこであるが空気をあやつるのがとてもうまく、声が大きい。力の関係は状況に応じて微妙に変化し、ぎりぎりのところで均衡をたもつ。均衡という言葉は最近、図鑑で覚えた。バランスと表現するよりかっこいい。

転校してくる前の草児が、そんなふうに考えたことは一度もなかった。世界はもっと、ぼんやりとしていた。自分がその世界の一部だったからだ。今は違う。世界と自分とがくっきりと隔てられている。ガラスだかアクリルだかわからないけど、なんだか分厚い透明ななにかに隔てられている。

②そう思うことで、むしろ草児の心はなぐさめられる。自分はこの学校になじめないのではなくて、ただ博物館で展示物を見ているように透明の仕切りごしに彼らを観察しているだけ、というポーズでどうにか顔を上げていられる。

今日はひとことも喋らない日だった。授業でも一度も当てられなかったし、消しゴムも落とさなかった。木曜日はつまらない。博物館の休館日だからだ。

家に帰ると、めずらしく母がいた。「シフトの都合」で、急きょ休みになったのだという。

ビールでも飲んじゃいますかねえ、などと冷蔵庫をいそいそと開ける母は以前よりすこし痩せた。明るい時間に顔を合わせるのはひさしぶりだった。祖母はいない。買いものに行ったという。

母はこの街に来て三日目に「仕事決まった！」とはしゃいでいた。百円ショップの店員となった母は、そのあとしばらくして「もっと稼がなきゃ」と言い出し、夜中の二時まで営業しているという釜めし屋の仕事を見つけてきて、昼も夜も働くようになった。たまに、売れ残りの釜めしを持ち帰る。それらはたいてい翌日の草児の朝食か、母の弁当になる。

（中略）

草児は膝の上の図鑑を開く。

カンブリア紀になると「目」のある生きものがあらわれ、体が立体的になりました。

もう何度も読んだ図鑑の、古生代カンブリア紀のページをそっと指で撫でてみる。

海の底をはって移動する暮らしから、泳いだりもぐったりするようになりました。それと同時に、生きものは、食べたり食べられたりするようになっていきました。

オルドビス紀やシルル紀になると、カンブリア紀よりも泳ぎのうまい生きものがあらわれました。生存競争はさらに激しくなっていきました。

来年、草児は中学生になる。

生存競争はさらに激しくなっていきました。

③草児は自分が「食べる側」になれるとは、どうしても思えない。勉強も運動も、できないわけではないが突出してできるわけではない。クラスにもなじめていない。「ありがとう」と言っただけで、岩かなにかが喋ったみたいにびっくりされているのだから。

お金のことなら気にしなくていいよ、と母は言う。不意打ちみたいに言ってくる。ふろ上がりの廊下ですれ違いざまに、あるいは、掃除機をかけながら。お母さんぜったい草ちゃんを大学まで行かせてあげたいんだよね、と。

「草ちゃんが将来、どこへでも、好きな場所に行けるように。お母さんがんばって働くし、働けるし、なんにも心配いらないからね」

（中略）

「シフトの都合」で予定外の休みをもらった母は、同じ理由で休みがなくなった。十連勤だなんて冗談じゃないよとぼやいていたのは最初の数日だけで、半ば頃になると家にいる時は無言でテーブルにつっぷしているだけの、物言わぬ生物になった。祖母はなんだか近頃調子が悪いといって、日中も寝てばかりいた。

古生代の生物たちも、こんなふうに干渉し合うことなく、暮らしていたのかもしれない。同じ家の中にいても、ほとんど言葉を交わさない。母や祖母の気配だけを感じつつ、ひとりで食卓に置かれたパンや釜めしを食べた。

④味がぜんぜんわからなかった。給食もそうだ。甘いとも辛いとも感じない。誰かと同じ空間にいても、人間は簡単に「ひとり」になるものだと、こんなふうになるずっと前から知っていた。

博物館の前に立ち、「本日休館日」の立て札を目にするなり、動けなくなってしまった。今日は木曜日だということをすっかり忘れていた。一色の絵の具で塗りつぶしたような毎日の中で、曜日の感覚が鈍っていたのかもしれない。

ワチャーというような声が頭上から降ってきて、振り返った。※③このあいだムササビの骨格標本を見上げていた男が草児のすぐ後ろに立っていた。今日は灰色のスーツを着ている。男の指がすっと持ち上がって、立て札を指す。ちょっと異様なぐらいに長く見える指だった。

「きみ知ってた？　今日休みって」
「うん」
男があまりに情けない様子だったので、つい警戒心がゆるみ「知ってたけど忘れてた」と反応してしまう。
「そうかあ」
中に入れないのならば、帰るしかない。背を向けて歩き出すと、男も後ろからついてくる。公園から出るには同じ方向に向かうしかないからあたりまえのことなのだが、気になって何度も振り返ってしまう。
「どうしたの？」
草児の視線を受けとめた男が、ゆったりと口を開く。なにを勘違いしたものか「なに？　腹減ってんの？」と質問を重ねる。違う。とっさに答えたが、嘘だった。腹は常に減っている。
男のアクセントはすこしへんだった。このあたりの人とも、草児とも違う。そのくせ、すこしも恥じてはいないようだ。
「あ、これ食う？」
書類やノートパソコンが入っていそうな鞄から、※④蒲焼きさん太郎が出てきた。差し出されたそれを草児が黙って見ていると、男はきまりわるそうに下を向き、**bホウソウ**を破いて、自分の口に入れた。
「そうだよな、あやしいよな。知らないおじさんが手渡してくる蒲焼きさん太郎なんか食べちゃだめだ」
しっかりしてるんだな、えらいな、うん、と勝手に納得し、男はベンチに座った。⑤鞄から、つぎつぎとお菓子が取り出される。いくつかのお菓子には見覚えがあり、そのほかははじめて目にする。うまい棒とポテトスナックは知っているが、なんとかボールと書いてあるお菓子は知らない。
「あの、なんで、そんなにいっぱいお菓子持ってるの」
おそるおそる問う。この男は草児が知っているどの大人とも違う。男はすこし考えてから「さあ？」と首を傾げた。自分自身のことなのに。
「安心するから、かな」
うまい棒を齧りながら、男は「何年か前に出張した時に」と喋り出した。帰りの新幹線が事故で何時間もとまったまま、という体験をしたのだという。いつ動き出すのかすらまったくわからなくて、不安だった。でも、新幹線に乗る前に売店で買った※⑥チップスターの筒を握りしめていると、なぜか安心した。その時、思いもよらないものが気持ちを支えてくれることもあるんだな、と知った。あれは単純に「食料がある」という安心感ではなかった、たとえば持っていたのが乾パンなどの※⑥非常食然としたものだったらもっと違った気がする、だからお菓子というものは自分の精神的な命綱のようなものだと思ったのだ、というようなことをのんびりと語る男に手招きされて、草児もベンチに座った。いつでも逃げられるように、すこし距離をとりつつ。
草児が背負っていたリュックからオレンジマーブルガムのボトルを出すと、男は「なんだよ、持ってるじゃないか」とうれしそうな顔をする。自分のガムはただのおやつであって、命綱なんかではない。
やっぱへんなやつだ、と身を引いた拍子に、手元が狂った。容器の蓋が開いてガムがばらばらと地面にこぼれ落ちる。草児は声を上げなかった。男もまた。映画館で映画を観るように、校長先生の話を聞くように、唇を結んだまま、丸いガムが土の上を転がっていくのを見守った。
気づいた時にはもう、涙があふれ出てしまっていた。頬を伝っていく滴は熱くて、でも顎からしたたり落ちる頃には冷たくなっていた。
⑥どうして泣いているのか自分でもよくわからなかった。ガムの容器の蓋をちゃんとしめていなかったこと。博物館の休みを忘れていたこと。男が蒲焼きさん太郎を差し出した時に蘇った、文ちゃんと過ごした日々のこと。
楽しかった時もいっぱいあった。
それなのに、どうしても文ちゃんに嫌だと言えなかったこと。嫌だと言えない自分が恥ずかしかったこと。別れを告げずに引っ越ししてしまったこと。
父が手紙をくれないこと。自分もなにを書いていいのかよくわからないこと。
今日も学校で、誰とも口をきかなかったこと。算数でわからないところがあったこと。でも先生に訊けなかったこと。
母がいつも家にいないこと。疲れた顔をしていること。祖母から好かれているのか嫌われているのかよくわからないこと。
いつも自分はここにいていいんだろうかと感じること。
男は泣いている草児を見てもおどろいた様子はなく、困惑するでもなく、かといって慰めようとするでもなかった。ただ「いろいろ、あるよね」とだけ、言った。

「え」と訊きかえした時には、涙はとまっていた。
いろいろ、と言った男は、けれども、草児の「いろいろ」をくわしく聞きだそうとはしなかった。
「いろいろある」
草児が繰り返すと、男は食べ終えたうまい棒の袋を細長く折って畳みはじめる。
A「ところできみは、なんでいつも博物館にいるの？」
「だよね、いつもいるよね？」と質問を重ねる男は、草児がいつもいるとわかるほど頻繁に博物館を訪れているのだ。
「恐竜とかが、好きだから」
大人に好きなものについて訊かれたら、かならずそう答えることにしている。嘘ではないが、太古の生物の中でもとりわけ恐竜を好むわけではない。にもかかわらずそう言うのは「そのほうがわかりやすいだろう」と感じるからだ。そう答えると、大人は「ああ、男の子だもんね」と勝手に納得してくれる。
「⑦あと、もっと前の時代のいろんな生きものにも、いっぱい、いっぱい興味がある」
⑧他の大人の前では言わない続きが、するりと口から出た。
エディアカラ紀、海の中で、とつぜんさまざまなかたちの生物が出現しました。
体はやわらかく、目やあし、背骨はなく、獲物をおそうこともありませんでした。
エディアカラ紀の生物には、食べたり食べられたりする関係はありませんでした。
図鑑を暗誦した。
草児は、そういう時代のそういうものとして生まれたかった。同級生に百円をたかられたり、喋っただけで奇異な目で見られたり、こっちはこっちでどう見られているか気にしたり、そんなんじゃなく、静かな海の底の砂の上で静かに生きているだけの生物として生まれたかった。
「行ってみたい？　エディアカラ紀」
唐突な質問に、うまく答えられない。この男は「エディアカラ紀」を観光地の名かなにかだと思っているのではないか。
「⑨タイムマシンがあればなー」
でもcソウジュウできるかな。ハンドルを左右に切るような動作をしてみせる。

「バスなら運転できるんだけどね。おれむかし、バスの運転手だったから」
男の言う「むかし」がどれぐらい前の話なのか、草児にはわからない。わからないので、黙って頷いた。むかしというからには今は運転手ではなく、なぜ運転手ではないのかという理由を、草児は訊ねない。男が「いろいろ」の詳細を訊かなかったように。
男がまた、見えないハンドルをあやつる。
一瞬ほんとうにバスに乗っているような気がした。バスが、長い長い時空のトンネルをぬけて、しぶきを上げながら海に潜っていく。いくつもの水泡が、窓ガラスに不規則な丸い模様を走らせる。
視界が濃く、青く、染まっていく。
海の底から生えた巨大な葉っぱのようなカルニオディスクス。楕円形にひろがるディッキンソニア。ゆったりとうごめく生きものたち。自分はそれらをいちいち指さし、男は薄く笑って応じるだろう。バスは音も立てずに進んでいく。砂についたタイヤの跡はやわらかいカーブを描き、その上を、図鑑には載っていない小さな生きものが横断する。
そこまで想像して、でも、と呟いた。
「もし行けたとしても、戻ってこられるのかな？」
タイムマシンで白亜紀に行ってしまうアニメ映画を、母と一緒に観たことがある。その映画では、途中でタイムマシンが恐竜に踏み壊されていた。その場面は強烈に覚えているのに、主人公が現代に戻ってきたのかどうかは覚えていない。
男が「さあ」と首を傾げる。さっきと同じ、他人事のような態度で。
「戻ってきたいの？」
そりゃあ、と言いかけて、自分でもよくわからなくなる。
「だって、えっと……戻ってこなかったら、心配するだろうから」
草ちゃんがどこにでも行けるように、と母は言ってくれるが、タイムマシンで原生代に行って二度と帰ってこなかったら、きっと泣くだろう。
「そうか。だいじな人がいるんだね」
おれもだよ、と言いながら、男はゆっくりと、草児から視線を外した。

「タイムマシンには乗れないんだ。仕事をさぼって博物館で現実逃避するぐらいがセキノヤマなんだ、おれには」
「さぼってるの？」
男は答えなかった。意図的に無視しているとわかった。そのかわりのように「ねえ、だいじな人って、たまにやっかいだよね」と息を吐いた。
「なんで？」
「やっかいで、だいじだ」
空は藍色の絵の具を足したように暗く、公園の木々は、ただの影になっている。きみもう帰りな、とやっぱりへんな、すくなくとも草児にはへんだと感じられるアクセントで言い、男が立ち上がる。うまい棒のかけらのようなものが空中にふわりと舞い散った。

いつもと同じ朝が、今日もまた来る。
トースターに入れたパンを焦がしてしまって、家を出るのがすこし遅れた。教室に入って宿題を出し、椅子に腰を下ろすと同時に担任が教室に入ってきた。あー！　誰かが甲高い叫び声を上げる。担任はいつものジャージを穿いていたが、上は黒いTシャツだった。恐竜の絵が描かれている。
「ティラノサウルス！」
誰かが指さす。せんせーなんで今日そんなかっこうしてんのー、と別の誰かが笑う。彼らは先生たちの変化にやたら敏感で、髪を切ったとか手をケガしたとか、そういったことにいちいち気づいて指摘せずにはいられないのだ。
「ちがう」
声を発したのが自分だと気づくのに、数秒を要した。みんながこちらを見ている。心の中で思ったことを、いつのまにか口に出していた。
担任から促されて立ち上がる。椅子が動く音が、やけに大きく聞こえる。
「ちがう、というのはどういう意味かな？　宮本さん」
「……それはアロサウルスの絵だと思います」
「なるほど。どう違うか説明できる？」

「時代が違います。ティラノサウルスは白亜紀末に現れた恐竜で、アロサウルスは、ジュラ紀です」
すべて図鑑の受け売りだった。
「続けて」
「えっと、どちらも肉食ですが、ティラノサウルスよりアロサウルスのほうが頭が小さい、という特徴があります」
ずっと喋らないようにしていた。笑われるのは無視されるよりずっとずっと嫌なことだった。おそるおそる目線だけ動かして教室を見まわしたが、笑っている者はひとりもいなかった。何人かは驚いたような顔で、何人かは注意深く様子をうかがうように、草児を見ている。「ありがとう。座っていいよ。宮本さん、くわしいんだな。説明もわかりやすかったよ」
感心したような声を上げた担任につられたように、誰かが「へー」と声を漏らすのが聞こえた。
「じゃあ、国語の教科書三十五ページ、みんな開いて」
なにごともなかったように、授業がはじまる。
国語の次は、体育の授業だった。体操服に着替えて体育館に向かう。体育館はいつも薄暗く、壁はひび割れ、床は傷だらけで冷たい。草児はここに来るたび、うっすらと暗い気持ちになる。
体育館シューズに履き替えていると、誰かが横に立った。草児より小柄な「誰か」はメガネを押し上げる。
「恐竜、好きなの？」
「うん」
草児が頷くと、メガネも頷いた。
「ぼくも」
そこで交わした言葉は、それだけだった。でも⑩誰かと並んで立つ体育館の床は、ほんのすこしだけ、冷たさがましに感じられる。

すこしずつ、すこしずつ、画用紙に色鉛筆で色を重ねるように季節が変わっていって、B草児が博物館に行く回数は減っていった。
体育館の靴箱の前で声をかけてきた男子の名は、杉田くんという。杉田くんは塾とピアノ教室とスイミング

に通っているから一緒に遊べるのは火曜日だけだ。そして、教室で話す相手は彼だけだ。それでももう、以前のように透明の板に隔てられているという感じはしなくなった。完全に取っ払われたわけではない。でも、透明のビニールぐらいになった気がしている。その気になればいつだって自力でぶち破れそうな厚さに。

「外でごはん食べよう」

帰宅した母が、そんなことを言い出す。突然なんなのと戸惑う祖母の背中を押すようにして向かった先はファミリーレストランだった。草児がそこに行きたいとせがんだからだ。

もっとぜいたくできるのに、と母は不満そうだったが、草児はぜいたくでなくてもよかった。ぜいたくとうれしいはイコールではない。

体調不良が続いていた祖母も、今日はめずらしく調子が良いようで、うすく化粧をして、明るいオレンジ色のカーディガンを羽織っている。四人がけの席につき、メニューを広げた。

「急に外食なんて、どうしたの」

草児が気になっていたことを、祖母が訊ねてくれる。頬杖をついていた母が「パートのわたしにも賞与が出たのよ」と言うなり、唇の両端をにいっと持ち上げた。

「それはよかった」

「それはよかった」

祖母の真似をしてみた草児に向かって、母がやさしく目を細める。

賞与の金額の話から、コテイシサンゼイが、ガクシホケンがどうのこうのというつまらない話がはじまったので、草児はひとりドリンクバーにむかう。

グラスにコーラを注いで席に戻る途中で、あの男がいるのに気づいた。

男は窓際の席にいた。ひとりではなかった。四人がけのテーブルに、誰かと横並びに座っている。

男の連れが男なのか女なのか、草児には判断できなかった。髪は背中にdタれるほど長く、着ている服は女もののようであるのに、顔や身体つきは男のようだ。

ふたりはただ隣に座っているだけで、触れあっているわけではない。にもかかわらず、近かった。身体はたしかに離れているのに、ぴったりとくっついているように見える。

男の前には湯気の立つ鉄板がある。男は鉄板上のハンバーグをナイフですいと切って、口に運ぶなり「フーフ

ァ」というような声を上げた。ムササビの骨格を見上げておどろいていた時とまったく同じ、間の抜けた声だった。

「あっつい」

「うん」

「でもうまい」

「ね」

男とその連れは視線を合わすことなく、短い言葉を交わす。声をかけようとした時、ふいに男が顔を上げた。挨拶しようと上げた草児の手が、宙で止まる。C男の首がゆっくりと左右に動くのに気づいたから。

男の視線が鉄板にかがみこんでいる隣の人間に注がれたのち、草児の母と祖母がいる席に向いた。迷いなくそちらを向いたことで草児は、男がとっくに自分に気づいていたと知る。

Dもう一度男が首を横に振った。口もとだけが微笑んでいた。だから草児も片手をゆっくりとおろして、自分の席に戻る。

男の隣にいる人間が男であるか女であるかは判断できないままだったが、そんなことは草児にとっては、どうでもいいことだった。あの人はきっと、男が鞄にしのばせているお菓子のような存在なんだろうなと勝手に思った。というよりも、そうでありますように、と。

E「いろいろある」世界から逃げ出したくなった時の命綱みたいな、「やっかいだけどだいじな人」とあの男が、ずっとずっと元気でありますようにと、名前も知らない彼らが幸せでありますようにと、神さまにお願いするように思った。

「なにかいいことがあった」

コーラにストローをさす草児に、祖母が問う。はてなマークがついていなくても、ちゃんとわかる。いつのまにかわかるようになった。祖母は今、たしかに自分に問いかけている。

「なんにも」と答えた自分の声がごまかしようがないほど弾んでいて、草児は笑い出してしまう。⑪ひとくち飲んでみたコーラはしっかりと甘かった。そのことが草児をさらに笑わせ、泣きたいような気分にもさせる。

（寺地はるな「タイムマシンに乗れないぼくたち」より（『タイムマシンに乗れないぼくたち』所収））

〈語注〉

※①うまい棒やおやつカルパス…ともに駄菓子の商品名。
※②懇願…必死に頼みこむこと。
※③このあいだ…本文の前の場面に、博物館でこの男から話しかけられたことが書かれている。
※④蒲焼きさん太郎…駄菓子の商品名。
※⑤チップスター…菓子の商品名。
※⑥非常食然としたもの…いかにも非常食らしいもの。
※⑦セキノヤマ…関の山。せいいっぱい。
※⑧賞与…給料とは別に支払われるお金。ボーナス。

〔設問〕解答はすべて、解答らんにおさまるように書きなさい。句読点なども一字分とします。

一　──線a「シュウカン」（14行目）、b「ホウソウ」（108行目）、c「ソウジュウ」（169行目）、d「タ」（265行目）のカタカナを、漢字で書きなさい。

二　──線①「文ちゃんのことを考えると、今でも手足がぐったりと重くなる」（4行目）とありますが、なぜですか。その理由としてふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選んで記号で答えなさい。

ア　文ちゃんはいつも自分を守ってくれていたのに、別れも言わずに転校してしまったことが申し訳ないから。
イ　文ちゃんとは親しい関係であったが、いつもおこづかいを暗に求められて拒めない自分がいやだったから。
ウ　文ちゃんはいつもしつこくつきまとってくる迷惑な存在だったので、思い出すとつらくなってしまうから。
エ　文ちゃんとは母親どうしも親しかったため、勝手な行動を母親に相談できない自分がもどかしかったから。

三　──線②「そう思うことで、むしろ草児の心はなぐさめられる」（45行目）とありますが、なぜですか。その理由としてふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選んで記号で答えなさい。

ア　クラスメイトに笑われたとしても、分厚い透明ななにかによって隔てられていると思うことで、彼らの存在を気にせずにいることができて安心するから。
イ　クラスメイトと分厚い透明ななにかを挟んで向かい合うことで、自分は危険がおよばない世界にいながら、みんなの弱点を発見しようという気持ちになるから。

ウ　クラスメイトから隔てられているとは考えず、透明の仕切りごしに彼らを観察していると思うことで、教室にとけこめない現実を意識しないですむから。
エ　クラスメイトを透明の仕切りごしにじっくりと観察することで、それぞれの性質や特徴を理解し、教室にとけこむきっかけを見いだすことができるから。

四　──線③「草児は自分が「食べる側」になれるとは、どうしても思えない」（71行目）とありますが、教室において「食べる側」とはどのような人たちですか。説明しなさい。

五　──線④「味がぜんぜんわからなかった。給食もそうだ。甘いとも辛いとも感じない」（87行目）とありますが、草児が「味がぜんぜんわからな」くなっているのは、家や学校でどのような状況にあるからですか。説明しなさい。

六　──線⑤「鞄から、つぎつぎとお菓子が取り出される」（110～111行目）とありますが、「男」は「お菓子」をどのようなものだと考えていますか。文中から十五字でぬき出しなさい。

七　──線⑥「どうして泣いているのか自分でもよくわからなかった」（131行目）とありますが、ここで草児は泣くことによってどのようなことに気づいていくのですか。その説明としてふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選んで記号で答えなさい。

ア　自分は父だけでなく祖母との関係もうまくいかず、家庭に居場所がないことに気づいていく。
イ　自分は博物館の休館日もおぼえておらず、何にも興味を持てないということに気づいていく。
ウ　自分は学校で級友や先生と話すことができず、誰にも必要とされていないことに気づいていく。
エ　自分は誰ともよい関係を結べておらず、どこにも安心できる居場所がないことに気づいていく。

八　──線⑦「あと、もっと前の時代のいろんな生きものにも、いっぱい、いっぱい興味がある」（156行目）とありますが、草児が特に「エディアカラ紀」という時代に「興味がある」のはなぜですか。説明しなさい。

九　──線⑧「他の大人の前では言わない続きが、するりと口から出た」（157行目）とありますが、なぜですか。説明しなさい。

十　──線⑨「タイムマシンがあればなー」（168行目）とありますが、「タイムマシン」で過去へ旅をする想像と、その後の「男」との会話を通して、草児はどのようなことに気づいたのですか。説明しなさい。

十一　――線⑩「誰かと並んで立つ体育館の床は、ほんのすこしだけ、冷たさがましに感じられる」（239～240行目）とありますが、ここには草児のどのような気持ちが表れていますか。説明しなさい。

十二　この作品では、「博物館」は草児にとってどのような場所としてえがかれていますか。～～～線A『『ところできみは、なんでいつも博物館にいるの？』～頻繁に博物館を訪れているのだ」（149～151行目）、～～～線B「草児が博物館に行く回数は減っていった」（242～243行目）をふまえて説明しなさい。

十三　――線⑪「ひとくち～気分にもさせる」（291～292行目）について、本文全体をふまえ、以下の問いに答えなさい。

（1）コーラが「しっかりと甘かった」ことが「草児をさらに笑わせ」るのはなぜですか。――線④「味がぜんぜん～感じない」（87行目）に注目して説明しなさい。

（2）コーラが「しっかりと甘かった」ことが、草児を「泣きたいような気分にもさせる」のはなぜですか。～～～線C「男の首がゆっくりと左右に動く」（277行目）、～～～線D「もう一度男が首を横に振った。～自分の席に戻る」（280～281行目）、～～～線E「「いろいろある」世界から～神さまにお願いするように思った」（285～287行目）に注目して説明しなさい。

〈問題はここで終わりです〉

〈以下余白〉

麻布

受験番号	
氏　名	

（２０２３年度）

国語解答用紙

一

a

b

c

d

二

三

四

五

六

七

八

九

＋

＋

＋

＋

1

2

（合　計）

（整理番号）